

高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録（下）

文：小林 茂

目録：長谷川敏文・波江彰彦

本稿は、2007年の「明治古典会、七夕古書大入札会」に出品された高木菊三郎旧蔵の地図関係資料のうち、とくに外邦図の一覧図を紹介するもので、『外邦図研究ニューズレター』6号（2009年3月）、63-73頁に掲載した、「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録（上）」（文：小林茂、目録：金美英・波江彰彦・鳴海邦匡）の続編である。この「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録（上）」では、その購入の経過にくわえ、以下の節を設けて、全11点の図を検討した。

1. 高木菊三郎の略歴
2. 11点の資料の形式と内容
3. 中国大陸の10万分の1地図の整備過程を概観する図群

本稿では、のこる12点の地図について、つぎのように大きく3つに分類してその特色を記述する。その第1は、多くは縮尺が500万分の1の、作業用の白地図とでもいふべき小さなものである。第2は一覧図類で、サイズはいずれも78センチ×110センチ前後と大きい。第3は、サイズ・内容は第2と同様であるが、高木菊三郎が作業用に使ったことが明らかな民国製地図の一覧図で、各所に手書きの記入が見られるものである。いずれも1枚物の地図であるが、このうち最も注目されるのは第3グループで、高木の陸地測量部での作業内容を推測させる。以下、これらについて順に述べたい。なお、あわせて付表の「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録（下）」を参照していただきたい。

4. 作業用白地図類

このグループには、⑫（仮題）満洲地域地形図配置図、⑬「五百万分一西伯利地方作業用素圖」、⑭（仮題）満洲周辺地区地形図配置図がある。なお丸の中の番号は、付表の枝番号に一致させている。

⑫（仮題）満洲地域地形図配置図の縮尺は、上記のように500万分の1で、東西は東経135度～同115度、南北は北緯39度～同53度を図示する円錐

図法による図で、国境や河川、鉄道、主要都市などのほか、50万分の1地図の図郭（東西2度30分、南北1度40分）および図名を示す。また各50万分の1地図の図郭は東西・南北それぞれ5つに分割され、その各区画は10万分の1地図の図郭（東西30分、南北20分）となる。ただしこの区画には、図の名称は示されていない。

図の中にみえる地名（「興安省」など）から、満洲国建国（1932〔昭和7〕年）以降、興安省の分省が省に昇格する1934（昭和9）年までの時期のものと思われる。図の中央南側には、太い破線（「解秘区域線」）が記入され、民間の利用に供された図の範囲を示している。この範囲は、陸地測量部（1935:9）の示す「十万分一満洲」の一覧図（民間に販売された図幅を示す）に示されているものと一致する。

つづく⑬「五百万分一西伯利地方作業用素圖」は、旧満洲から「外蒙古」、さらにそれに接するシベリア南部を図示する。東西は東経127度～同89度、南北は北緯40度～同56度をカバーする円錐図法による図で、⑫（仮題）満洲地域地形図配置図の北西に広がる広大な地域を図示することになる。やはり国境や河川、鉄道、主要都市などのほか、50万分の1地図の図郭（東西2度30分、南北1度40分）を示すが、図名が示されているのは、旧満洲およびそれに接する部分にすぎない。また10万分の1地図の図郭（東西30分、南北20分）が全域にわたって示されているが、図名の記入は見られない。本図の作製時期は、「興安西省」・「興安南省」といった地名から1934（昭和9）年～1944（昭和19）年と思われる。

⑭（仮題）満洲周辺地区地形図配置図も縮尺は500万分の1と考えられるが、円錐図法ではなく、メルカトル図法となっている。東西は東経130度～115度、南北は北緯41度40分～51度40分を図示する。50万分の1図の図郭・図名とともに、10万分の1の図郭・図名も示す。

この10万分の1図の図郭・図名で特徴的なのは、

図の左よりやや下の、「烏珠穆沁」・「林西」（いずれも50万分の1図幅名）の西端に、「此空欄ハ測圖基點ノ根據ヲ異ニセシヨリ生セシ誤差ノ結果ナリ但此空欄ニ面スル各圖葉ハ接續ス」との注記をとまなう、南北に連続する9つの図郭がみられることである。この注記は長岡(2009: 86)の図Ⅲ-1-1aにもみられ、その作成時期をうかがわせる。また、本図には、太い実線、破線、二点鎖線がみられ、このうち実線については、それが囲む区域の中央に「發賣區域」と記入されている。上記陸地測量部(1935: 9)の示す「十万分一滿洲」の一覽図には、当時民間で発売されたものにくわえ、斜線を施して(民間に)「發行豫定モノ」も示されており、比較すると、この実線に一致する。この点から、本図は1935(昭和10)年以降に作成されたと見てよいであろう。

上記の3つの図は、縮尺・様式・図示範囲が類似し、いずれも旧滿洲およびその周辺の10万分の1図の整備に関連して作成されたものと考えられる。なお、⑮(仮題)メルカートル図法世界白地図は、小さな世界図の白地図で、その用途はまったく別と考えられるが、白地図ということでこのグループに置いておきたい。

5. 「外邦局地圖一覽圖」およびそれに関連する図

これに分類されるのは、⑩「外邦局地圖一覽圖(其一)」および⑳「外邦局地圖一覽圖(其二)」、さらに㉒「西伯利滿洲及支那地區一覽圖(其二)」である。いずれも1940(昭和15)年3月25日発行であることにくわえ、長岡(2009: 98-99)の表Ⅲ-1-7から、他にもう一点の図をくわえ、「機秘密圖一覽表(内國圖及臨時圖)」として一括して刊行されたと考えられる(なお「西伯利滿洲及支那地區一覽圖」は長岡[2009: 98-99]の表Ⅲ-1-7では「西伯利、滿洲及支那外邦局地圖一覽圖」となっているが、長岡[1993: 25]の表7では「西伯利、滿洲及支那地區地圖一覽圖」で、長岡[2009]の表記は誤植である可能性が大きい。また、この図群のタイトルには「内國」とあるが、そうした図は含まれていないという)。なお⑩「外邦局地圖一覽圖(其一)」および⑳「外邦局地圖一覽圖(其二)」の右肩には、ゴム印により朱で「陸地測量部作業用、第壹四壹號」と記されている。㉒「西伯利滿洲及支那地區一覽圖(其

二)」にも同様の記入があったと考えられるが、同図のこの部分は切り取られており確認できない。

これらの地図の特色として、長岡(2009: 93)は、多数の市街図を示すことにくわえ、現地部隊からの地図請求用の略符号が全地図に付されており、地図払い出しの迅速・正確化がはかられたとしている。⑩「外邦局地圖一覽圖(其一)」の5000分の1「旅順要塞近傍圖」を例にすると、「五セン」という縮尺を示す略号にくわえ、「リヨサ」という略号を朱で印刷するとともに、同図群全94枚に番号を付している。第二次世界大戦参戦前の時期に、各地でつくられた外邦図を一括して一覽図として示そうとした意図がうかがえる。

この図群の中には、これまでの外邦図研究で注目してきた空中写真による図も見られる。⑩「外邦局地圖一覽圖(其一)」では、2.5万分の1の「膠濟鐵道沿線空中寫眞測量要圖」(小林・渡辺・鳴海2009)、「空中寫眞測量上海近傍」(小林2009)、㉑「外邦局地圖一覽圖(其二)」では「五万分一黄河沿岸空中寫眞要圖」などがそれである。これらの図によって、1940(昭和15)年までに外邦図として整備された空中写真による図について、概要を把握することが可能となる。

また、第二次世界大戦の主戦場になった地域に関する、この時点までの大縮尺地図の整備状況についても、一定の展望をあたえる。⑩「外邦局地圖一覽圖(其一)」にみえる東南アジア・太平洋地域の図は、2.5万分の1図がポナペ島(12枚)、パラオ列島(16枚)、サイパン島(5枚)、5万分の1図がジョホール地域(25枚)、マラッカ(1枚)、10万分の1図が、マレー半島(3枚)、同様に㉑「外邦局地圖一覽圖(其二)」では、5万分の1図がグアム島(3枚)、オアフ島(8枚)、呂宋(ルソン)島(22枚)とたいへんすくない。小林編(2009)の表紙カバーに示した④「南方地區地圖整備目録」の索引圖にみえる同地域の大縮尺図の整備状況(1941[昭和16]年10月)と比較すると大きな差が見られ、その間外国製地図の入手に大きな努力が払われたことがうかがわれる。

なお、㉒「西伯利滿洲及支那地區一覽圖(其二)」については、下部中央の図が大きく切り取られていることを付記しておきたい。切り取られた部分に掲

載されていた図は、長岡（2009: 98-99）の表Ⅲ-1-7の注記と比較すると、カムチャツカの10万分の1図、満洲や東亜の50万分の1図であったと考えられる。

6. 作業用に使用された民国製地図の一覧図

このグループの特色は、すでに示したように、民国製の地形図の一覧図であること、さらに印刷図に各種の書き込みが見られ、作業用に使用されたことがあきらかなことである。縮尺から、これらは大きく2つに分けることができ、一方は5万分の1図に関するもの、他方は10万分の1に関するものとなる。

これらの印刷図の作成契機として考えられるのは、1937（昭和12）年12月の南京事件にともなう民国軍参謀本部陸地測量總局における大量の民国製図の「鹵獲」である（高木著・藤原編1992: 115-240）。これによって大量の地図を入手した陸地測量部では、その全容の把握にむけて、これらの地図を整備したと考えられる。まず取り上げる⑰「民国製五万分一圖一覽表」と⑱「民国製五万分一圖一覽表」は、印刷図としては同じもので、備考に「斜線ヲ施セルモノハ未押収圖ヲ示ス」とし、さらに「製版セルモノハ別表民国製北南支那五万分一圖一覽表ニ示ス」と、すでにこの図の作成時点で民国製図の複製がはじまっていたことを示している。図示される図幅の範囲は、河北省・山東省・江蘇省・浙江省・広東省・海南島といった海岸部から、山西省・河南省・安徽省・湖北省・湖南省・江西省、さらに綏遠省・陝西省・四川省・雲南省といった内陸部におよび、日中戦争にとって大きな意義をもったことが明らかである。すでに⑧（仮称）民国製五万分一圖の精度評価図

（1938 [昭和13] 年製版・同9月発行の「民国製五万分一圖一覽表」をベースマップとして、色鉛筆で精度の違いを表記）を紹介したが、この両図での作業は、これをさらに発展させるものであったと推測される。

両者における書き込み部分は大きくちがいが、まず⑰「民国製五万分一圖一覽表」の場合、図の中央やや上部の、山西省の西から南における黄河の流路に沿った地域および江蘇省の徐州付近を青鉛筆で着色する。この背景の推測は容易ではないが、黄河流域

の場合は、1938 [昭和13] 年4月に空中写真を撮影し、1939年に発行した上記「五万分一黄河沿岸空中寫眞要図」の成果との調整が考えられる。また徐州付近の場合は、1942年の空中写真による地図作製（ただし縮尺は10万分の1）との関係が考えられよう。

これに対し、⑲「民国製五万分一圖一覽表」の場合は、書き込みが左下の部分に集中する。印刷図では斜線が施され、未入手であった広東省南西部～広西省南部の地図が、押収されたこと（1939 [昭和14] 年）などが、これから判明する。また広西省の桂林から南寧にかけては、新しい図の入手に成功した模様で、その図郭や図名を記入している。新しい情報を一覧図に反映させようとする作業といえよう。

10万分の1図にうつろう。⑲「民国製十万分一圖一覽表」、⑳「民国製十万分一圖入手区域・複製区域一覽表」、㉑「民国製十万分一圖一覽表」と3点があるが、いずれも元図である印刷図は同一のものである。図の範囲は5万分の1図と同様に広範囲におよんでいる。右下の備考に「斜線ノ部ハ未入手圖ヲ示ス」とする。その分布を見ると、雲南省・青海省・寧夏省に多く、四川省の一部にも見られる。

つぎに各図を個別的看着てみたい。⑲「民国製十万分一圖一覽表」で注目されるのは、広東省・江西省などの省境部分に見られる着色と書き込みで、おそらく各省が独自につくってきた図幅が省境の部分で、他の省の作成したものと整合せず、その調整をはかるものと考えられる。また図の左手には、10万分1図が入手できていなかった雲南省について、新たに入手したと考えられる図幅名について昆明を中心として示している。その特色としてあげられるのは、各図郭の図示範囲が大きいという点であるが、これについては別途検討する必要がある。

これに対して、㉑「民国製十万分一圖入手区域・複製区域一覽表」は着色を全域におよぼすもので、付表に示したように、未入手区域から縮製区域まで6つに分類している。ここで複製のため製版された区域を見ると、内陸部が多いことがわかる。これは、海岸部に関する地図の整備が進んでいたためであろう。また四川省や貴州省のような、さらに内陸部の製版がおこなわれていないのは、その必要性が低かったからと考えられる。

⑳「民國製十万分一圖一覽表」は以上に対して、広東省を中心とする地域について、図上に硫酸紙を重ねている。これに新しい図の原稿になるような図形や文字を記入する。また図の左下の「昭和十四年製版／昭和十四年二月発行」とある部分に硫酸紙を重ね、製版年を「十五」、また発行年月を「十五年三月」と朱で記入して修正しようとしている。

この硫酸紙上に書かれた図郭は、他より大きく、ふつうの図を4つあわせたサイズである。また、この範囲は㉑「民國製十万分一圖入手区域・複製区域一覽表」で「入手図製版（四六版）」と示された地域に一致する。こうした大きなサイズの図が印刷されたかどうかについては、さらに検討を要する。これまで刊行された外邦図目録（東北大学大学院理学研究科地理学教室 2003；京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室 2005；お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007）には見あたらないようである。

以上、全 23 点の地図あるいは小冊子体の地図について紹介した。これをもとに上記の図を分類すれば、つぎのようになる。

まずあげられるのは、中国大陸と旧満洲における外邦図の作製を概観する手書きの小冊子体の地図で、

- ①「大正十一年以降支那製十万分一図ニ依ル改造『北支那十万分一図』及『南支那十万分一図』整備要図」
- ②「明治四十二年以降臨時測図部、支那駐屯軍司令部所測仮製十万分一図整備経過要図」
- ③「明治二十七八年乃至昭和七年満洲十万分一図整備要図」

がそれにあたる。これらは高木によってコンパイルされたもので、本コレクションの中では最も重要である。多くの外邦図の現物を参照しつつ作製されたもので、①は中国製地図の利用、②は日本軍関係者の秘密測量、③は旧満洲における日本の地図作製活動の変化を図によって示しており、今後これらに示されたプロセスを検討する必要がある。

つぎに重要なのは、日本軍が入手した民国製地図の整理と活用に関連する図と表で、

- ⑥「支那製二十万分一圖精度調査一覽表」

⑧（仮称）民國製五万分一圖の精度評価図

⑬「民國製五万分一圖一覽表」

⑭「民國製五万分一圖一覽表」

⑮「民國製十万分一圖一覽表」

⑰「民國製十万分一圖入手区域・複製区域一覽表」

⑱「民國製十万分一圖一覽表」

がそれにあたる。南京事件に際して大量に接収した民国製地図の精度評価にはじまり、新たに入手した図をくわえた一覽図の作製、複製の作製などに関係する。これらは、高木が陸地測量部でおこなっていた作業の一端を示すものとなる。

これらにあわせて注目しておくべきは、作業用に作製された白地図類で、

⑫（仮題）満洲地域地形図配置図

⑬「五百万分一西伯利地方作業用素圖」

⑭（仮題）満洲周辺地区地形図配置図

がそれにあたる。

そのほかで意義が大きいのは、

①「南方地區地圖整備目録」（1941年10月）

②「直隸・熱河・察哈爾地形圖目録」

⑬「外邦局地圖一覽圖（其一）」（1940年3月）

⑭「外邦局地圖一覽圖（其二）」（1940年3月）

⑱「西伯利満洲及支那地圖一覽圖（其二）」（1940年3月）

といった一覽図類である。とくに④「南方地區地圖整備目録」は第二次世界対戦参戦直前の外邦図の準備状況を示すものとして大きな意義がある。「支那地域兵要地圖整備目録」（1944年6月）の一部であったことがあきらかな、

⑥「㉑兵要地誌圖」、

⑨「①航空圖」

⑩「⑨地形圖 其二（本製假製十万分一）」

もふくめて、一覽図は、それが作製された時期をよく反映しており、これによく留意しつつ利用することがもとめられている。

文献

お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007. 『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学文教育学部地理学教室、全 234 頁。

- 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室 2005. 『京都大学総合博物館収蔵外邦図目録』京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科地理学教室, 全 177 頁.
- 小林 茂編 2009. 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会.
- 小林 茂解説 2009. 乍浦鎮 (二万五千分一空中寫眞測量上海近傍南部二十七號). 小林 茂編 2009. 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 1.
- 小林 茂・渡辺理絵・鳴海邦匡 2009. アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製. 小林 茂編 2009. 『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 228-245.
- 高木菊三郎著, 藤原彰編 1992. 『外邦兵要地図整備誌』(十五年戦争極秘資料集, 第三〇集) 不二出版.
- 東北大学大学院理学研究科地理学教室 2003. 『東北大学所蔵外邦図目録』東北大学大学院理学研究科地理学教室, 全 250 頁.
- 長岡正利 1993. 陸地測量部外邦図作製の記録—陸地測量部・参謀本部 外邦図一覧図. 地図 31(4): 12-25.
- 長岡正利 2009. 陸地測量部外邦図作製の記録—陸地測量部・参謀本部 外邦図一覧図. 小林 茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』82-108, 大阪大学出版会.
- 陸地測量部 1935. 『陸地測量部發行地圖目録』陸地測量部.